

90's Nostalgia

立松千宙

オールナイト上映の帰り道

カフェインと砂糖でべたべたの繁華街

暗雲の隙間幽かに見えた

日の出前の不穏な瑠璃色

朝焼けに照らされた機能不全のビル

屋上から突き出たタワークレーンが

厳めしい顔で睨んでいる気がして

僕は足早に駅へと急ぐ

今が一番寒い時間

広告塔をやめた液晶

早引けした街灯

光が幽かな街の景色が

瞬きの隙間の再上映と重なった

35ミリのフィルムが紡ぐ

暗い画面と荒い色彩

今と似て非なる生活様式

どこか空虚な街の息遣い

ノイズがかった言葉が紡ぐは

自己と他者との遠い空白

根拠の乏しい投げやりなナーバス

悲観と無関心の果てに続く拘束

故に自己陶酔的センチメンタル

故に現実逃避的破滅願望

紗幕を隔てた過去の情景を

いつだって僕は追い求めている

画面の向こうにしか存在しない時代

人の伝聞でしか知り得ることの出来ない時代

他人事のはずの時代の狂騒に

どうして胸が締め付けられるのだろう

人の疎らなホームの隅で

肩を竦めて朝日を待ちながら

幻肢痛のようなノスタルジックの

正体を僕は追い求めている